「不登校とは？！理解から生まれる生きやすい社会」

こんにちは！コレクティブふくおか＋事務局です。
コレクティブふくおか+の「中高生の不登校・精神面を支える」チームが、社会課題の解決に向けて取り組んでいる NPO法人 箱崎自由学舎ESPERANZA（えすぺらんさ）の現場へ伺い、インタビューした内容を記事にまとめてくれました。ぜひ、ご一読ください。

「あら！また不登校のニュースだって。私たちの頃は、そんなのなかったのにねぇ～。
今の子は、すぐ休むじゃない？昔は、学校に行かないなんてありえなかったわよ。」

これは2年前、私が直接耳にした女性二人（50代くらい）の会話の一部です。

昔はかなり珍しいとされていた「不登校」。しかし、九十年代頃からその数は急増し、今や小・中学での不登校の子どもの数は**20万人**近くにも達しています。そして、その数は減少するどころか、むしろ年々増加し続けているのが現状。

ここで一つ、質問があります！それは『**不登校に対するイメージ**』。不登校と聞くと、ネガティブなイメージを持たれる方が多いかと思います。

以前に比べ認知が広がった不登校ですが、世間の理解は追いついていないように思います。「不登校」とインターネットで検索していただけると分かるように、未だ世間では「不登校＝甘え」、「今の子どもは弱い」、「不登校の子どもをどうにか復帰させなければ」と捉えている方も少なからずいます。不登校はダメ、不登校を改善してあげるという考え方が社会には残っています。

不登校に対するネガティブなイメージばかりが社会に先走りしてしまうことで、その背景にある問題や不登校の子どもたち一人ひとりが抱えた困難に蓋をしてしまっているのではないでしょうか？

本当に深刻な問題は不登校の子どもが増えている事よりも、**不登校に対するマイナスイメージに固執してしまっていることにより、社会の理解が欠如**していることなのかもしれせん。

もし、不登校が選択肢の一つだという考えがあったら、、、
そのことにより、救われることもたくさんあるのではないかと思います。

そこで今回は、その中で不登校の子どもたちに居場所を提供し、様々な体験活動を通して、社会適応力を育み、人間の生きる喜びを体験できる温かい教育空間を提供している**NPO法人 箱崎自由学舎ESPERANZA（えすぺらんさ）の上村一隆**（かみむらかずたか）さんに取材させていただきました。

是非、最後までご一読ください！

目次

1.　新たな学びの場としてのフリースクール 『えすぺらんさ』とは？！
2. 立ちはだかる壁？：実は意外と気づかない落し穴
3. 上村さんが目指すもの

◆新たな学びの場としてのフリースクール 『えすぺらんさ』とは？！

突然ですが、皆さん**「フリースクール」**の存在をご存知ですか？
フリースクールは、様々な理由で学校に通っていない子どもたちに居場所を提供する施設です。主に、フリースクールは、個人や民間企業、NPO法人によって運営されており、設立目的や、活動内容、規模や形態は多

様です。
フリースクールの主な特徴は、サポート校や通信校とは違い**入学資格を設けていないこと**、学校のような**決まったカリキュラムがない**ことなどが挙げられます。

（※NPO法人とは、営利を目的としない組織のことで、法に基づいて都道府県または指定都市の認証を受けて設立された法人のことです。）

「えすぺらんさ」には、上村さん含め4人の心温かい、だけど個性豊かで面白いスタッフの皆さんがいらっしゃいます。そんな「えすぺらんさ」についてこれからご紹介させていただきます！

えすぺらんさでは、在籍校と連携し、出席を認めてもうことができます。また、授業の進め方・試験の受け方では、本人の意向に沿うように、ご家庭・在籍校とも相談したりしながら、教科学習にも取り組んでいるそうです。

高等学校卒業資格を取得したい人に関しては、通信制高校に同時入学していただき、そこを卒業できるようにさまざまなサポートを行っています。例えば、レポート提出のための授業や、スクーリングへの出席指導、テスト対策、生活指導等など、従来の高等学校とは違い、生徒一人ひとりの個性や学力、適性に合わせたきめ細かい指導を少人数教育で行います。また、勉学だけでなく一人ひとりの個性を伸ばそうと田植えや料理といった行事も行っています。料理では子どもたちが自ら献立を作っています。

なるほど。「えすぺらんさ」には、子どもたちが自分たちで選択できる環境があるんですね！

ー「えすぺらんさ」の設立の背景とは？えすぺらんさ設立の秘話について教えてください！！

上村さん：自分はえすぺらんさの設立メンバーではないのですが、自分が活動を始めた当時は子どもたちにとっての「学びの環境」は、「学校」の一択で、他の選択肢はほとんどありませんでした。そうなると、学校に行かない・行けない子どもたちは、学ぶ機会そのものがありません。学校に行っていないことで、学ぶことができないのは、違う。学校以外にも、学びの環境は必要なのではないか？と思ったんです。

上村さんのこの言葉から子どもたちの学びの環境に対する選択肢を増やしたいという想いの強さを感じました。**現状、不登校を良しとしない社会の考えの方が強いなか、「不登校を改善するのではなく、不登校を理解する取り組みを広げたい」**というのが、えすぺらんさのベースになっていると思います。**選択肢の一つとしてフリースクールという「学べる環境」がある事を知ってもらう。**

このような想いが集まっている「えすぺらんさ」。
さらにインタビューさせていただくにつれ、上村さんの想いが徐々に見えてきました。

ーフリースクールの中でも色んな「**選択肢**」を提示する事を大切にしているんですか？

上村さん：そうですね。僕らができることは、あくまで選択肢の提示です。例えば、えすぺらんさでは田植えの行事もやっているんですが…。

ーはい、ホームページでみました！すごく楽しそうですね！

上村さん：田植えの行事でも、やる気がある子やあんまり乗り気じゃない子もいるんですよ。ちなみに僕は田植え、好きじゃないです（笑）。だって汚れるし嫌じゃないですか！
でも、あくまで選択肢の一つとして設けているんです。それぞれ意味があって、例えば田植えだとある一定のところまでは手を掛けますが、それを超えると一切手をかけない。あとは、稲の育つ力を信じましょう！ということです。
でも、それって子どもと一緒ではないかというところもあるんですよね。ただ、それもあくまで選択肢であって、大人が思っているほど子どもたちが外活動を喜ばない。だってそれは、自分だってそうだから。だって、夏暑いのに田植えなんかしたくないもん！

でもそこで、僕はちゃんと子どもにも「俺も田んぼ嫌いだし」って言ってます。そう言うことで、子どもたちになんで嫌いなのに行くんだろう？って思わせるのも大事だし、普段自分のところに来ない子どもが、田んぼの時だけ「だるいね」って言ってくるんですよね。みんながみんな、「明日遠足楽しんでいこぜ！」って大人ばっかりだと子どもって疲れてしまう。だから、それも選択肢を与えることだと思ってます。
これまでの集団生活で、行事はきちんと取り組むべきという固定概念を植え付けられていますよね。しかし、大人になるうえで時には適度に力を抜くことも必要だと思うんですよ。そのため、子どものうちに**一度これが正しいと教えられてきたものを「本当にそうなのか？」「いや、違うよね」っていう崩すプロセスが大事**だと思っています。

このような活動を行う上村さん。インタビューの際、上村さんは子どもたちと接するうえで自らのことを**”身近な他人”**と表現されていました。

上村さん:「これは人によると思う。子どもにどっぷり寄り添うっていうフリースクールもあるでしょうし、それはうちのスタッフの中でもあるでしょうし。**ただ、僕たちは親代わりにもなれないし、保護者でもない 。要は、責任が取れない局面というのは必ず出てくる。だから、身近な他人であるべきだと思う。」**

子どもに対しても素直に接する。この距離感と接し方が子どもとの信頼関係を作るように感じます。

◆立ちはだかる壁？:実は、意外と気づかない落とし穴。

ここで、皆さんにクイズです。「お母さんが子どもに言うセリフの第1位ってなんだと思いますか？」
※実は、10年以上不動の第1位です。

これは、私達が取材をさせていただいた時、上村さんから言われたことです。

「んーー、宿題しなさい？」
「ちゃんとしなさい！」
んー、色々と浮かんできますね。

実は、第1位は、、、

「早くしなさい！」だそうです。

ー「ああー！分かる！言われてた！」私も答えを知った時思いました。
皆さんも一度は親御さんから言われたり、あるいはお子さんに言ったことがあるのではないでしょうか。
「ん？これの何が落とし穴？」

この落とし穴とは、**大人の時間軸に子どもを引きずり込んでいること**です。

何気なく発している言葉が、時に子どもにとって大きな変化を与えてしまっている恐れがあります。子どもは大人のペースに必死に追いつこうと努力しますが、大人は子どもを待ってはくれません。大人のあたりまえは子どもにとっても同じとは限らないのです。

また、上村さんはこう私たちに話してくださいました。

上村さん：早くしなさい！という言葉に対して、思うことは一つです。急いでいるのは大人なんです。生活する中で、大人は子どもの時間軸に合わせてあげるということがなかなかできていないのが現状です。 合わせたくても世間の時間の流れもありますし、社会や周囲の同調圧力に押されてしまっているのかもしれません。**不登校の問題を難しくしているのは、学校でも教育委員会でもなく、「不登校は、良くない・改善させるべき。」といった社会からのマイナスイメージや不登校の捉え方なのかもしれないと感じています。**

この、早くしなさい！と似たような話として、ある学校行事があります。皆さん、中学2年生の時に立志式なんてありませんでしたか？

ーありました！将来の夢とかをみんなの前で発表するような会ですよね、、？

上村さん：そうそう。夢とか語らせられるんですよ、中学校2年生になると。それだと、**夢を持っていると凄いヤツで、持っていないとダメなヤツ**になっちゃうんですよ。でも、夢に出会うタイミングって人それぞれじゃないですか。だから、そこを待てばいいのに中2だからっていうだけで語らせるわけですよ。

ーああ、私も立志式で嘘いったな～。（笑）
正直、将来のことなんてわからなかったので。
無理矢理こじつけてでも将来の夢を語りました。

上村さん：嘘をつける子はいいんですよ。（僕も作文なんか嘘ばっかり書いたもん）ただ、中学2年生じゃなくてもいいんです。なんでもきちんと立ててしまうとこれまた、大人の時間軸になっちゃうので。嘘をつけないような子どもたちには、**「いい加減、適当」**だとかっていう部分の言葉での意味を、ちゃんと伝える必要があるのかなと思います。

これらの言葉って、子どもたちにはネガティブな意味に伝わってしまっています。
いい加減って、加える減らすのバランスが取れてるからいい加減であって。適当もそれに適度に当てはまるから適当なのであって。

多くの人が**「お互いの個性を認め合うこと」**が子どもの過ごしやすい環境を作る一つになるかもしれません。ここでは、大人と子どもにおいてですが、それは社会においてもそうです。一方が独走状態になってしまっていては、互いの溝は深まるばかりです。歩み寄る必要があるのではないでしょうか？

◆上村さんが目指すもの
ーところで、上村さん。この活動をされる中での気付きやしんどさというのは感じたことはありますか？

上村さん：子どもたちや保護者の方たちとの関係において基本的にしんどいことはありません。しかし、運営のことを考えると、しんどい気持ちは出てくるでしょうし、僕は色んなネットワークに関わっている身なので、他団体との関係性だったり、教育行政と関わりの中で「なんでこうならないのかな」と思ったりします。なので、制度設計についても考えたいなと僕は思っています。日々何か子どもたちと過ごして楽しいね、元気に卒業してよかったね、だけではなくて、、、。
フリースクールに出会っていないたくさんの子どもたち。もしかすると、出会っていたら利用したかった、行ってみたい！と思っていたかもしれませんし、これから利用したい！と考える子どもは少なからずいるのではないかと思います。そのためにも、保護者にどう届けるか、子どもたちにとって少しでも社会が生きやすい環境になるためには、制度設計についても考えなければいけないと思っていて、常にそのためにはどうしたらいいかということは考えています。

これまで、フリースクールの情報はまとまって発信されることが少なく、保護者がフリースクールの情報を自らかき集めて個別に団体を訪ねることが多かったんです。もしかしたら、フリースクール自体を知らないお子さんや保護者の方がいるかもしれないのです。

ー上村さんの今後の展望はありますか？

上村さん：僕らが選択肢になるような活動はしたい。フリースクールを利用するのにはお金がかかるし、文科省の調査では、全国平均で月3万3千円かかっているという結果もあります。子どもたちのために！という想いから無償でされているフリースクールもありますが、場所代、管理費、光熱費など居場所を確保するだけでもお金がかかります。経済的な理由でフリースクールを利用できないご家庭があるため、制度化をすることで、経済的な理由によらず、学べる場を選択できるようにしたいと思っています。しかし、各地域の自治体ごとに合わせたやり方があると思っています。その中でも、福岡は不登校支援に教育行政が理解のある自治体なので、**福岡独自で発信できるもの**を作っていけたらいいなと考えています。

現在、福岡県では約1万人くらい、福岡市は3,000人くらい不登校の児童生徒がいます。その中でフリースクールに通っている生徒さんって10%もいないんですね。（約5%くらい）残りの95%の子どもたちはどうなっているのかなという時に、その子たちが、フリースクールを知った上で、家にいる選択をする分には良いのですが、フリースクールを**知ってたら利用したかったのに…という子がいなくなるように、必要な方がフリースクールの情報を知ることができ、利用できるシステムを作りたいかな。**

上村さんは自身がフリースクールのプラットフォームになることを目指されてるように感じました。子どもにも個性があるように、フリースクールにも個性があります。その子にあったフリースクールに通えるよう、フリースクール同士が連携を組み、子どもを受け入れるという仕組みづくりをおこなってきたいとおっしゃっていました。

◆最後に

（※上村さんとメンバー3人で写真をパシャリ！）

いかかでしたか？
今回は、NPO法人 箱崎自由学舎ESPERANZA（えすぺらんさ）さんに取材をさせていただきました。

上村さんにインタビューさせていただく前までは、フリースクールは、「不登校で学校に行っていない人を学校に戻すこと」が一番の目的で、学校に復帰できるよう支援を行っているのだと思っていました。
しかし、当初のイメージとは全く違い、フリースクールは、「学びの場」の選択肢の一つとして存在し、支援ではなく共に！目線や時間軸を揃えて一緒に乗り越えていく仲間のような印象を受けました。今回のインタビューを通じて、不登校の子どもだけでなく、子どもを取り巻く環境、例えば、保護者の悩みを打ち明ける場がないこと、フリースクールの認知が正しく広がっていないこと、不登校に対する社会の理解が得られていないことなどを上村さんとお話しさせていただく中で学ぶことができました。また、「不登校」が抱える問題は、子どもたちだけでなく、むしろ子どもたちを取り巻く環境にもあることを知りました。

そして、これまでは、「人と違うこと（をする）」のはダメなこと。恥ずかしいこと。批判されること。と自分の中で決めつけ、無意識のうちに人と違うことはおかしいことだと思い込んでしまっていました。不登校に対しても同じで、はじめは不登校に対するマイナスイメージから、「不登校の子を助けてあげたい」、「どうにか学校に通えるようにしてあげたい」という一方的な想いが強かったです。ですが、「してあげなきゃ！」という想いが時に、誰かにとっての苦痛になってしまう恐れがあります。「個性を大事にしよう！自分らしくいて欲しい。」当初はそう思っていました。だけど、自分らしくが分からないから悩んでいる人もたくさんいます。一人ひとり見た目や声が違うように、考え方や受け取り方も十人十色なのです。上村さんは、それを**“想いが邪魔をする事がある”**という表現をしていました。

「不登校」はまだまだ、社会の理解が得づらいのが現状です。
不登校自体をなくそう！とするのではなく、不登校を理解してみる。これが、私たちにできる第一歩ではないでしょうか？

不登校は子どもだけでなく、周りの親、そして一般の方々も関わっています。多くの人が認め合う、理解し合うことが生きやすい世の中に繋がると思います。

囚われた枠組みから物事を捉えるのではなく、一度自分を脇におき、別の立場、視点から考えてみるのもいいかもしれません。

不登校に限らず、常識や当たり前の価値観（ここでは、学校に行くことが当たり前）にとらわれることで、息苦しさや生きづらさ（周りは理解してくれない）を感じることは他にもたくさんあるのではないでしょうか？

社会がますます多様化していく中で、これまでの常識や価値観を変える必要がでてくる場面がさらに増えてくるかもしれません。
そのような時に、多様な他者の考えを受け入れながら、共に社会を変えていくことがみんなにとって生きやすい世の中へと繋がっていくのではないかと思います。

【中高生の不登校・精神面を支えるチーム】
あーたんさーたん（大学生）、Shunsuke（大学生）、南蛮（大学生）

（取材日：2021年12月7日）